



大決壊!

おもろいしな

快感

～目次～

第壹話

誰にも**言えない**、気持ちいい秘密

第貳話

学校で我慢の果てに……**セウト**！

第参話

絶頂失禁は**女の子の特権**だよね！

第四話

スパッツでうんちおもらし！

第伍話

雨の中なら**おもらし**しても
大丈夫だよね！

第六話

授業中の**おむつ**おもらし！

学校で我慢の果てに……セウト！

(はぁ……、刺激のない毎日……)

初夏の抜けるような青空に、たった一つだけ浮かんだ綿雲を見つけ、雫は憂鬱げなため息を漏らしてしまう。

歩いているのはいつもの代わり映えのしない閑静な住宅街を抜けていく通学路。

学校までは歩いて大体20分くらいかかる。

(おもらしショーツ穿いてるのに、最近全然熱くなれない……。慣れって怖い。あたし、変態なのかな)

最初のころはおもらしショーツを穿いているとバレたらどうしよう、どうなってしまうんだろうとドキドキして、色々妄想してしまっ、教室につくころにはショーツをぐしょ濡れのヌルヌルにさせていたものだ。

けどいまではそういうことは無くなった。

(あのころの純粹だったころのあたしに戻りたい……)

それを言ったら、おねしょしたショーツを穿いて登校しようだなんて思いつく時点で純粹じゃないし。

むしろ変態だし。

しかも今となっては、いつもおもしろいショーツを穿いて登校してきている。

ちゃんと匂いがしないように消臭スプレーを持ち歩いているし、スカートのお尻に染みができていないか、しっかり注意しながら。

(もう、すっかり慣れちゃったなあ)

いつもおもしろいショーツがおまたに食い込んでくっていると、だんだんとその刺激に慣れてきてしまっていて、なんというか、刺激が足りないような気がしてくる。

(そうだ)

いつもの通学路をぼんやりと登校しながら、雫はハッと閃く。

思わず立ち止まりそうになるけど、そ

こは我慢して。

しかし脳内ではすでに次なるエッチなことを妄想している。

それは……。

(学校でおもらし……してみる？ でも、そんなことしたら気づかれちゃうかもしれないし……！)

歩きながら、頬が熱くなるのを感じる。

こうなってしまうと火がついた女体は収まってはくれない。

(やだ。なんでドキドキしてるの？)

学校でおもらしするところを想像しただけで、トクン、胸が高鳴って、落ち着いてきたはずの秘筋がじゅわりと熱くなってくる。

(ぱんつのなか、熱くなってきてる)

そんなことを考えながら、いつものように校門をくぐって昇降口で上履きに履きかえる。

ショーツが見えないように、しっかり

と気を遣いながら。



(うっ〜、おまた、むらむらする)

雫が人知れず眉をしかめてしまったのは昼休みの教室でのことだった。

ちょっとお行儀が悪いけど、本を読みながら購買部で買って来た菓子パンを無心に咀嚼する。

だけどいつもならすぐに読書に集中できるはずなのに、雫の意識はぱんつにばかり集中していた。

(もう、クロッチ……お尻までヌルヌルだよ……)

もぞもぞと、やや肉の乗りすぎた太ももを擦り合わせる。

するとクロッチの裏側に、ネバツとした糸が張る、気持ち悪い感触がした。

一度昂ぶった女体は、どんなに平静を装おうとしても、ショーツを淫靡な汁で汚してしまう。

(エッチなこと、頭から離れないし！)

諸悪の根源は、朝にふと思いついてしまったアイディア。

学校でおもらしをしたら、どうなってしまうのだろうか？

どんなに気持ちいいことだろうか？

そのことがずっと頭から離れずに昼休みになり、いまや雫のショーツはおもらしをしたかのように愛液でヌルヌルになっていた。

「ふう」

雫は誰にも悟られない小さな、しかし熱い吐息を漏らすと、パタンと文庫本を閉じる。

そしてヌルとしたショーツに顔をしかめながらも立ち上がると、トイレへと向かうのだった。



「うわぁ。ぱんつの裏側、発酵してるし」

女子トイレの個室でショーツを降ろす。

すると露わになったクロッチの裏側

は、愛液や少女の汚れで茶色く発酵していた。

それは栗きんとんの残りかすによく似ていた。

モワァ……。

ショーツのなかから立ち昇ってきたのは、おしっこと汗、そして少女の匂いが混じり合った、チーズ系のすっぱい香り。

ゆうべから穿き続けてきたおねしょショーツは、いまにも力尽きそうになっていた。

「でも、まだクロッチの外側にまで染み出してきてないからセーフ……だよ……ね？」

そのクロッチも、何回もおもらし遊びをしてきたせいでかすかに黄ばんで毛玉ができているのだけど。

しかもムチッとした雫のお尻のせいでゴムが伸びている。

「おまた、拭いところ……」

赤ん坊のようにつるんとしたパイパンは、蒸れ蒸れショーツのせいでかすかに赤らんでいた。

このままではかぶれて痒くなってしまうかもしれない。

「はぁ……」

ふきふき、ふきふき。

おしっこもしてないのにおまたを拭くのは、なんだか虚しくて負けたような気になる。

というかおまたが気になりすぎておしっこをし忘れていた。

「むむむ。せっかく拭いたのに、ここでおしっこをするのは本格的に負けた気がする……」

男の子はちんちんがあるからおしっこをしても拭かなくてもいいらしいけど、女の子はワレメからおしっこが出てくるのだ。

だからおしっこをしたらしっかりと拭いてあげないといけない。

「おしっこを……、するべきか、せざるべきか」

1時間前の休み時間に用を足していたので、そこまで尿意を感じているというわけではない。

これならあと2時限……放課後まで大丈夫だろう。

「おしっこ、我慢しちゃう？　してみちゃおうか？」

クロッチを見つめながら、雫は呟く。
ティッシュで拭っている股間がほんの少し熱くなる。

(もしも学校でおもらししたら、どんなに気持ちいいだろう)

キュン！
無毛の縦筋が痙攣し、ピンクの肉のフードを脱いだ肉芽が固く勃起している。

(とりあえず、おしっこは我慢しておいて……。それで、まだ漏らすって決めたわけじゃないしね)

心のなかでそんな言い訳をしながらも、雫はふう、熱い吐息を漏らす。

「男子はちんちんが勃起すればそれで済むらしいけど、女はおまたが濡れてきちゃうのがなー」

おかげで雫のショーツのなかはいつも湿度100%だ。

雫は最後の仕上げにとトイレットペーパーを手に取ると、

「……ンッ」

ワレメの深いところまで指を食い込ませてしっかり拭く。

こびりついてくるのは、栗きんとんの残りかすのような汚れ。

「はぁ……。こういうときはちんちんっが欲しくなる……」

くにくに、くにくに。

何回か肉裂を優しく拭き拭き、往復させて綺麗にしておく。

だけどあんまり拭きすぎるとおまたがこすれて痛くなってしまうから、拭きす

ぎはよくない。

「おまた、綺麗になったけど……ぱんつは……」

クロッチの裏側には、発酵した女子汁がべっとりと貼り付いている。

拭けば、少しは綺麗になるだろうけど――。

「このまま、穿きたい。……無性に」

いつもおねしょショーツを穿いて登校してきている雫は、自らの汚辱されたショーツに興奮してしまっていた。

雫は洋式の便座から立ち上がると、

「……んっ！」

雫はショーツを穿くと、キュンッ、おまたが痺れて、お尻を後ろに突きだしてしまう。

クロッチに、クレヴァスの痙攣が浮き上がった。



(おしっこ、しとくんだったああ!!)

雫が心のなかで絶叫したのは6時限目の理科の授業中のことだった。

だけど後悔してももう遅い。

6時間目の授業はすでに始まって5分が経とうとしている。

教壇では白衣を引っかけた女性教諭が重力に関する説明をしているところだった。

まだ授業は始まったばかり。

このタイミングでトイレに行きたいだなんて言うのは、いくら雫の根底に変態性癖が染みついているとはいえ恥ずかしくない。

放課後まで、あと45分——。

ジュワ……。

ジュワワ……。

(あっ、駄目……)

おまたから滲み出す恥水に、クロッチの裏側が生温かくなる。

椅子に座ったままでおもらしをすると、縦筋から漏れ出てきたおしっこは

会陰を伝ってお尻へと広がっていく。

放課後まで、40分——。

(こ、これは……！ 最初からクライマックスう……!!)

じゅもも……、
じゅもももももっ。

キュン！ キュン！

おまたが痙攣して、そのたびにおしっこが漏れ出してくる。

もう、なりふり構っていられなかった。

放課後まで残り35分——。

(まさか、授業中にこのフォーメーションをとることになろうとは……!! あたしとしたことが！)

じゅもももももっ。

むぎゅっ。

雫は机の下に左手を忍ばせると、あろうことか授業中だというのに股間を前抑えする。

教壇に立ってる教師からは生徒がこそ

こそと隠れてスマホをいじっているのが丸見えだったりするらしいが……、いまはそんなことを気にしている場合じゃない。

ここで漏らしたが最後、雫の学園生活が終了する。

あと30分——。

(も、持ち直したか……!?)

前抑えしながら、恥水を溜め込んだ膀胱という名のダムの貯水率を探る。……前抑えしている両手で。

(セ、セーフ……！　まだだ、まだ終わらんよ……！)

前抑えしたおかげで、どうやらすぐそこにある危機は去ったようだ。

しかしこれは一時しのぎでしかない。

膀胱に溜まった恥水を放流しなければ、こうしている瞬間にも一滴一滴、おしっこは膀胱に濾過されているのだ。

そのことは雫が一番よく理解している。

放課後まで、あと25分——。

(そうそう簡単に漏れるものではない……！)

じゅわわっ、
じょぼぼっ。

「あっ、ああっ」

スカートの上から前抑えしていても感じる、しみだしてくる生温かい恥水。
早くも、前抑えでも凌ぎきれなくなっている。
あと20分——。

(で、でも……。まだ諦めたわけでは……っ)

じゅわわっ、
じゅわわわわっ。

ジワジワと、しかし確実におもらししながらも、雫はまだ諦めてはいなかった。
むしろ、濡れた股間は熱くヌメっていた。
15分——。

(曰く、おしっこを限界まで我慢してから放出すると、その快感は男子の射精に近いものになると云う……！)

以前、射精に興味があって調べたときに得た知識。

つまりこの状況は、考えようによっては射精のお預けを受けている……焦らしプレイとも言える！

残り10分……！

(溜まってる！ あたしの膀胱に！ ザーメンが！ なみなみと溜まっているうう！)

決壊寸前の尿道がキュンキュンと痙攣し、もうこの左手を離したが最後、山吹色の波紋がオーバードライブするに違いなかった。

あと、5分……！

(燃え尽きるほどヒートおおおおお……!!)

じゅももっ、
じゅわわわわっ！

(まだだ、まだ慌てる時間じゃない。左手は添えるだけ、左手は添えるだけ……！)

じゅわわっ、
ジワワワ……。

この黄金の左手を股間から離れた瞬間、大決壊してしまうことは間違いなかった。

しかしゴールはもうすぐそこまできている。

あと3分。

180秒を乗り越えることができれば勝ちが確定するのだ。

(こ、こういうときは素数を数えて心を落ち着けるんだ……!! 1, 3, 5, 7, 11……って、1って素数だったっけ!?)

そんなことを考えながらも授業は締めこみに差しかかり、次の授業までの宿題コーナーになり――。

――だが。

「あー、そうそう。ちょっとキリが悪いから、やっぱりもう少しだけ進めておくか」

無情にも告げられる延長戦の宣言。
理科の女性教諭は再び教科書を開くと、黒板にカツカツとチョークを走らせて公式を書いていく。
(口、ロスタイム……！)

この瞬間、雫はこの世の終わりを目の当たりにしたかのような表情を浮かべていたに違いなかった。

瞳孔が開き、過呼吸に陥りそうになる。

全身の毛穴という毛穴から汗が噴き出してきて、意識が真っ白になる。

(み、見える……！ あたしにも……見えるぞ！ 刻の涙が……見える！)

しゅいいいいい……。

しゅわわわわわわわ……。

「も、もう……だめえ……」

左手から、フッと力が抜けると、ショ

ーツのなかに取り返しをつかない温もりが広がっていく。

クロッチの裏側におしっこが弾けて、パンパンに張っていた膀胱が楽になってしまい――

「次の授業では、この公式を使って問題を解いていくから、しっかりとノートにとっておくように。それでは今日はここまで！」

女性教諭が言い終えるや否や。

ガタッ！ 雫は勢いよく席を立ち上がった。

もはや前抑えをしていなければ、恐るべき尿圧を抑え込むことができなくなっている。

だけどいまはそんなことを気にしている余裕さえもない。

「あっ、う！ うー！」

ジュワワ……。

しゅいはいい……

なんとか立ち上がるも、パンパンに張った膀胱のせいで背筋を伸ばして立つ

ことができなくなっている。

それでも雫は他の生徒に前抑えしていると悟られないように、前屈みになって教室の机のあいだをすり抜けて、廊下に。

「も、もう我慢できない……!!」

じゅもももも！

ぷしゅっ、しゅわわわっ！

廊下に出ただけで気が抜けてしまったとでもいうのだろうか？

かなりの量をショーツのなかへと放ってしまう。

力尽きたクロッチからおしっこが滲み出してきて、太ももを伝い落ちていく感触。

フッと意識が遠のく。

「あぁ……。もう、ゴールしても、いいよね……？」

しゅわわわわ……。

しゅiiiiiiiiiiii……。

廊下に出ると、そこはすでに放課後の

ざわついたいつもの風景が流れていた。

そんななかショーツのなかにレモネードが弾け、楽になろうとしている。

ここで漏らしたが最後、教室でおもらしたときの比ではない。

少なくとも他のクラス……、更には学園中におもらしたことが知れ渡ってしまうことだろう。

「^{あん}安○先生……、バスケがしたいんです！」

じゅもももももももも……。

もはや、おもしろしながら歩いているのか？

それとも歩きなから漏らしているのか
雫にも分からなくなっている。

ただ、たしかに分かること。

それはここで諦めたが最後、試合終了で、更には人生終了のお知らせであることだ。

尊敬できる先生も言っていたではないか。

「諦めたら、そこで試合終了ですよ……っ」

ぽた……、ぽたた……。

リノリウムの廊下に、おしっこの足跡を残しながらも、雫はなんとか下校中の生徒たちの合間を縫って女子トイレへと辿り着くことができた。

ピンクのタイルは女子トイレの証。いくつかの個室は使用中らしいけど、一番奥の個室のドアは開いている。ここまでくれば、あともう一息だ。

「はっ、はうう！」

じょぼぼぼぼぼぼぼぼ！

女子トイレに踏み込んだ瞬間、ほんのりと感じるアンモニア臭に身体が勝手に反応してしまったとでもいうのだろうか？

ごまかしようもない量を漏らしてしまう。

じゅわり……。

前抑えしているスカートから生温かい恥水が滲みだしてくると、ぽたぽたとト

イレの石床へと落ちていく。

「あっ！ ひっ！ ひああ！」

しゅiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii……。

しゅわわわわわわわわわわわわ……。

もう前抑えをしても漏れ出してきてしまう。

それにトイレに駆け込むためには鍵を閉めなくてはいけないのだ。

そのときに股間から片手を離さなくてはならない。

けどもう片手とか両手とか言ってもらえる状況でもなかった。

「もう、我慢できない……！」

じょぼぼぼぼぼぼぼぼぼ！

ぷっしゅiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！

おもしろしながらも雫は個室へと駆け込むと扉を閉める。

それと同時に鍵を閉めれば、もうそこは雫と洋式トイレの二人だけの世界だ。

鍵を閉めた雫はスカートを翻すと、ドスンッ、大きな音を立ててトイレの便座

に腰掛けた。
その直後。

プッシュアアア
アアアアアアアアアア！

「はぁ〜〜〜〜〜〜〜！」

雫は、至福のため息とともに、勢いよくおしっこを噴射していた。

「間に合ったあああああ!! でっ、出る！ おしっこ……、止まらな……！ あっ、ひん！」

プッシュウウウウ
ウウウウウウウウ！

短くも太い少女の尿道からおしっこが噴き出してくると、ふんわりとしたアンモニア臭が立ち昇ってくる。

ぽた、ぽたた……。

しかし凄まじいまでのおしっこの勢いとは裏腹に、水音はどこか控えめでくぐもっていて、しかも大きな水滴となって

トイレの水面へと落ちている。

そう……。

雫は、ショーツを降ろすことさえもできずに、トイレで失禁してしまっていたのだ。

「ぱんつのなかっ、熱くて……！ おまたに弾けてきて……！ んっ、ふああああ！」

ぷっしゃあ！

ぷっしゃああああ！

ぷっしゃあああああああああああ！

我慢していたおしっこを一気に噴出した快楽に、おまたが痙攣し、そのたびにおしっこが信じられないほどの勢いで噴き出してくる。

それは女子として、いままで味わったことのない開放感であり、快楽だった。

「で、出る……！ ふっ、ふううう！
で、射精……る!!」

ビュク！ ビュクク！

じゅもももももっ、じゅももっ！

おしっこに混じって、やや白濁した汁

がショーツから滲み出してくる。

失禁と同時に、雫はたしかに絶頂していた。

股間から溢れ出しているのは潮なのか？

愛液なのか？

それとも本気で逝ったときに溢れ出してくる本気汁なのか？

それはショーツを穿いているから分からない。

ただ、ショーツのなかでは快樂が渦巻き、弾けている。

「あっ、ぐっ、ぐう！」

ガクンッ、ガクンッ！

腰が勝手に前後にスライドするように暴れ回る。

処女なのに、ザーメンを搾り取ろうと腰が痙攣しているのだ。

「おっ、おっおっ！ お尻が、勝手に震えて……！ あっ！ あああっ！ ああん！」

ジョボボボボボボボボボボ！

じゅもももももももももも！



痙攣しながらも、我慢に我慢を重ねていたおしっこが噴き出してきてはクロッチの裏側に弾ける。

もしもショーツを穿いていなければ、おしっこが目の前にある個室のドアに噴きつけられていたことだろう。

「おっ、おしっこお……！ 気持ちいいのっ、止まらな……んっ、はあああああああああ！」

ぷっっっっ！

しゃあああああああああ！

視界が真っ白になる。

女としての本能在、五感のすべてを子宮に総動員して痙攣し、クレヴァスから汁という汁を噴出していった。

「はあ……っ、はあ……っ、はああ……！」

しゅiiiiiiiiiiiiiiiiii……。

すべての痙攣が収まったころ。

火照った頬を弛緩させた雫は、同じように緩みきった尿道から残尿を垂れ流し

にしていた。

ショーツに染みこんだおしっこは、お尻を愛撫してくれる生温かい手のようでもある。

「す、凄かった……」

しゅわわわわわわわわわ……。。

ピクンッ！　ピククッ！

残尿を漏らしながらも、桃色に染まった太ももが痙攣する。

太ももが痙攣しているということは、ショーツのなかのクレヴァスも、そして膣壁も痙攣しているということだ。

軟体生物のように、熱く蠢いている膣壁――。

その深奥から、ドロツとした白濁汁が溢れ出してくると、クロッチの裏側に溜まっていった。

「学校なのに……、こんなにエッチな子宮のムーブが……、止まらなくなってるよ……」

女の子は、1回だけでは我慢できない。

男は1発出せば満足できるけど、女の子は精液を吸い取らなくてはいけないから、絶頂が長く続くようにできているのだ。

「触りたい——」

呟きながら、ショーツのなかに手を入れかけ……、しかし思いとどまる。

ここは学校なのだ。

これ以上エッチなことをするわけにはいかない。

今日のところはここで我慢しておかなければ。

「はぁ……、はぁぁ……、す、凄かった……」

学校でおもらしするのって、こんなに気持ちよくてドキドキするものだなって。

落ち着いてくると、サーッと、心地いいノイズが聞こえてくる。

絶頂したあとの、心地いいノイズ。

寄せては返す、波のような。

「学校でおもらしするのって、こんなに

気持ちよかったんだ」

しゅいいいいい……。

最後の一滴まで、快楽を堪能するかの
ように漏らし、はふう、至福の吐息を一
つ。

それから更に5分くらいはぼんやりと
していたと思う。

熱かったショーツ……お尻の部分が冷
たくなってきて、ふと現実に戻された
のだった。

「気持ちよかったぁ……」

雫は洋式の便座から立ち上がるとスカ
ートの裾を直す。

ショーツを脱いだほうが良いのは分
かっている。

だけどいまここでショーツを綺麗に
洗って、おまたを綺麗に拭いたとしても
家に帰るころにはショーツがヌルヌルに
なっているに違いない。

「クロッチ、まだ熱いや。イケナイこ
と、しちゃってるんだ」

クロッチの裏側に背徳的な熱を宿しながら、雫はトイレの個室をあとにする。そして何食わぬ顔で何食わぬ顔で教室に戻るとカバンを回収して、いつものように下校風景へと溶け込んでいく。
(今日はショーツを汚しちゃった女子、他に何人いるのかなー)

ふと、そんなことを考えてしまって、雫は下校中の他の女子たちのスカートの裾を気にしてしまう。

(――まさか、いるわけない、か)

雫が一笑に伏したそのとき、初夏の風がいたずらっぽく内股をくすぐっていった。

体験版はここまでです！

ここまで読んでくれて

ありがとうございました！

～既刊案内～







大決壊シリーズ

DLsiteにて

配信中！

